資料紹介　国分直一から寺師見國への手紙

竹森友子

はじめに

鹿児島県歴史・美術センター黎明館には、一九三〇年代から逝去する昭和三十四（一九五九）年まで鹿児島県の考古学に大きな力を尽くした医者で考古学者の寺師見國（てらし みくに）が調査・採集・発掘した考古資料や、発掘調査のメモ、蔵書、書簡など二万点余りが寄贈され収蔵されている。本館は、南種子町所在の広田遺跡の出土貝製品など二一二六点を所蔵するが、広田遺跡の第一次～三次調査にたずさわったのが国分直一（こくぶ なおいち）である。今回は、氏が寺師見國へ宛てた手紙四通のうち二通を紹介したい。

一　国分直一について[1]

国分直一（一九〇八―二〇〇五年）は東京市に生まれ、父の仕事の関係でその年の内に渡台し、大学三年間を除き昭和二十四（一九四九）年まで台湾で過ごした。大学は京都大学史学科で、国史を専攻（昭和五年入学同八年卒業）している。京都大学では西田直二郎・喜田貞吉・三品彰英らの講義を聴き民族学・民俗学への関心を強くしたが、本格的に考古学や民俗学の調査を行うようになるのは、昭和十八年に台北師範学校本科教授として任用され、台北帝国大学医学部の金関丈夫（かなせき たけお）の研究室に入り浸るようになってからである。このころから台湾中・北部の先史遺跡の調査を進め、同二十年には金関と共に台北市郊外の巨石遺跡を発掘している。民俗学的調査としては、台北盆地の閩族系農家や桃園台地の客家系農家などの調査を台北師範学校本科の学生同志と行っている。

昭和二十四年八月に日本に帰国し、同二十六年九月には鹿児島県の指宿高等学校教諭に任用された。赴任した翌年の夏には、今和泉渡瀬遺跡（八月一～三日）、種子島・屋久島の先史遺跡（八月二十一～二十三日）、山川遺跡（九月二十一～二十三日）と精力的に調査を行っている。[2] 鹿児島県で考古学の調査研究を共にしたのが、寺師や三友国五郎・河口貞徳・盛園尚孝らであった。また、赴任の翌月には指宿高等学校郷土研究部を組織し、[3]『薩南民俗』を創刊して民俗の採集を始め、小野重朗や重久十郎を見出した。同二十九年には農林省水産講習所助教授として任用され鹿児島県を離れたが、その後も広田遺跡や面縄（おもなわ）第二貝塚（伊仙町）、一湊（いっそう）遺跡（上屋久町　現屋久島町）、成川遺跡（山川町　現指宿市）など主に南西諸島や南薩の遺跡調査に関わっている。

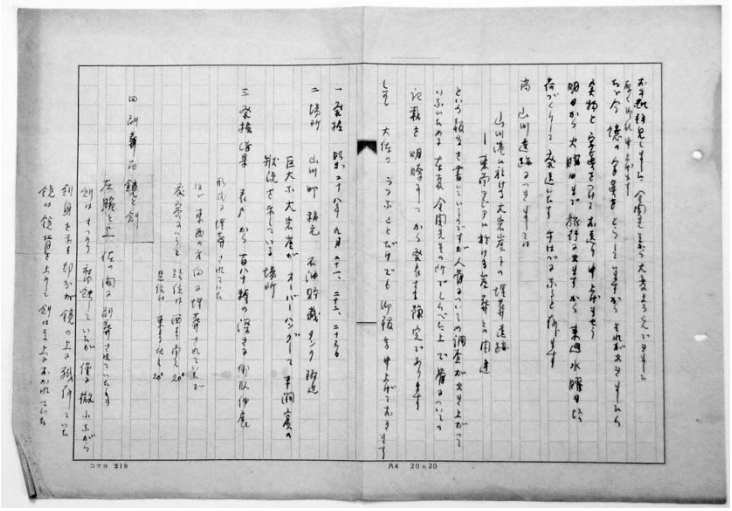
今回紹介する手紙は、山川遺跡や広田遺跡に関係するものである。

二　年不詳六月二十四日付の手紙

（一）本文

お手紙拝見しました。金関先生から大変よろこんで居ました
厚く御礼申上げます
たゞ今鏡の写真をとらしていますから　それがあきましたら
実物と　写真をつけて　お送り申上げませう
明日から　大晦日まで　旅行に出ますから　来週水曜日頃

写真　年不詳六月二十四日付の手紙（一部）



荷づくりして　発送いたす　手はずになると存じます

尚　山川遺跡につきましては

山川港に於ける大岩崖下の埋葬遺跡

―東南アジアに於ける崖葬との関連

という報告を書いているのですが人骨についての調査が出来上がっていないために　本夏　金関先生の所でしらべた上で骨についての記載を　明瞭にしてから発表する豫定であります

しかし　大体の　ラフなことだけでも　御報告申上げておきます

一　発掘　昭和二十八年九月二十一、二十二、二十三日

二　場所　山川町福元　石油貯蔵タンク附近

巨大な大岩崖がオーバーハングして平洞窟の状況を示している場所

三　発掘結果　表層から百八十糎の深さに仰臥伸展形式に埋葬されていた

ほゞ東西の方向に埋葬されていたが厳密にいうと　頭位は　西より南え　20°

足位は　東より北え　20°

四　副葬品　鏡と剣

左腕と上体の間に副葬されていたもの

剣はすつかり腐食していたが僅かに微少ながら剣身を示す部分が鏡の上に残存していた

鏡は鏡背を上にして剣はその上におかれていた

五　その他の遺物

埋葬人骨直上の層中には祝部式土器片が発見され　その下に　市来式土器口縁がえられた　人骨はこれら遺物包含層の直下に見出された

その他に鹿骨製の用途不明骨器　及び

用途不明の石包丁形　石器（但し刃部形成はみられない）が上層から出土している

大体以上であります　資料の発送は写真の都合より来週になりますが　状況の御報告をさきにいたしておきます

尚御高教と御指導をいただいて努力してきました末の論文いよ〳〵清書にかゝっています　すべてかくの如きスローモーションにて御迷わくかけること多大であります

尚　種子島の発掘報告別刷りをおとゞけ申上げます

台湾の報告も同封いたします

種子島の曽畑遺跡を中心とした報告は私が　ひきうけてまとめあげたものですが　発表してみると　色々　申しわけない　不手ぎわが目立ちます

それでは今日はこれで失礼いたします

六月二十四日　　国分直一

寺師見国先生

（二）解説

山川遺跡とあるのは、指宿市山川福元所在の福元洞窟遺跡のことと思われ、昭和三十年に「鹿児島県山川港に於ける崖葬」として国分により報告されている。手紙には昭和二十八年九月二十一～二十三日に発掘したとあるが、報告では昭和二十七年になっている。指宿高等学校教官重久十郎及び、同校郷土研究部所属の学生達が参加して発掘が行われたようだ。[4] 報告に「鏡は寺師見国氏によると瑞花双鷲八稜鏡（ずいかそうおうはちりょうきょう）と考えられるとのことである。[5]」とあるから、この手紙は出土した鏡について所見を求めた手紙の一部であろう。

「種子島の発掘報告別刷り」とあるのは『考古学雑誌』三九巻一号掲載のもの[6]と思われ、「種子島の曽畑遺跡」とは、曽畑式の単一遺跡である西之表市所在の本城遺跡であろう。雑誌が発行されたのが昭和二十八年五月、寺師は瑞花双鷲八稜鏡を同二十九年に拓本付きで紹介している[7]から、手紙が書かれたのは、昭和二十八年もしくは同二十九年であろう。

三　年月日不詳の手紙

（一）本文

寺師先生御無沙汰いたしています

かなり前に　種子島広田の人骨の身長について

おたづねいただいていたのでありますが最近　金関先生にお会いしました所　縄紋人の平均身長と全く同じだという御返事でありました　弥生期の身長としては低いということになると存じます

それから二、三年前大口市で考古学会がひらかれました時　先生のコレクション中にA氏がもたらされたという　奄美大島本島出土の磨製石斧があまりに葦北の磨研有孔石斧に見られる器形に酷似している（孔はなくとも）ことから　おどろいたのでありますが　その後　種子島広田で葬玉形式の埋葬がみつかったりしたものですからいよいよ関連資料として注目すべきだと考え金関先生に図をお送りしたのです（あの時採図さしていただいたもの）が先生も私と同意見でした

そこでA氏コレクションのあの石器の出土地名（大島本島としかわかっていませんようでありましたが）がもしもつとくわしくわかるようでありましたら　すばらしいと存じます

鹿児島大学構内から鼎脚も出ています　これも大きな問題となりそうであります

※個人名については伏せてA氏とした。ご了承願いたい。なおAに関しては、奄美大島本島にA名称未定遺跡が鹿児島県遺跡分布地図[8]に存在しており、地名と人名を間違えた可能性がある。

（二）解説

「二、三年前大口市で考古学会がひらかれました時」とあるが、昭和三十年の十一月に大口小学校で考古学会が開かれている[9]ので、同三十二年もしくはそ

の翌年に書かれた手紙であろう。寺師は国分に広田出土人骨の身長について尋ねたようだが、同三十三年一月の寺師の日記を見ると、前年末に学校医会で鹿児島県の学童の体格が全国と比べて劣っているため、体格と遺伝について調べるようにとの命を受けたのをきっかけに「本県の上代人の身長」という原稿を書いている。質問がそれと関係しているとすれば、手紙が書かれたのは昭和三十三年の可能性が高い。

国分が問題にしている磨製石斧は、残念ながら黎明館の寺師コレクション中には存在していない。葬玉形式の埋葬とは、中国の秦漢の遺品によってのみ知られる飾玉の呪力で遺体を護ろうとする思想による埋葬形式で、死者の口に含ませる含玉（がんぎょく）、眼や鼻孔・耳孔を埋める瑱玉（てんぎょく）、両手に握らせる握（あく）、死体を飾玉で覆うこともあるという。国分は、種子島では玉のかわりに貝を使ったと考えていた[10]ようだ。国分や金関が、奄美大島本島出土の磨製石斧や広田遺跡の貝製品の埋葬状況から何を言おうとしていたかや、鹿児島大学構内出土の鼎脚については筆者にはわからなかった。ぜひご教授いただきたい。

おわりに

国分直一は、生涯江南、台湾、南西諸島の文化交流の追究に力を注いでいた。考古学・民族学・民俗学の領域を広く研究した国分の学問は「国分学」とも呼ばれている[11]が、それは発掘調査や民族・民俗調査の積み重ねであり、また調査地在住の人々と一緒に調査を行うことにより、「その郷土地方の歴史や生活を考え探り、分析し、その上に我々自身のあり方を考えて行く[12]」ことを目指しているのであろう。今回紹介した手紙が、国分の学問理解に役立てば幸いである。

注

（1）甲元真之「国分直一博士略年譜」（国分直一博士古稀記念論集編纂委員会『日本民族文化とその周辺　歴史・民族篇』新日本教育図書、一九八〇年）。一章に関しては、他に注を付けない限り、これを参考にしている。

（2）出口浩・池畑耕一「鹿児島県考古学年史」（『鹿児島考古』第二〇号、一九八六年）一〇四～一〇六頁。

（3）肥後喜男「郷土研究会の誕生から雑誌創刊迄」（『薩南民俗』第一号、一九五二年）六一頁。

（4）『農林省水産講習所報告　人文科学篇』第一号、一九五五年、二頁。

（5）前掲注4参照のこと、四頁。

（6）三友国五郎・河口貞徳・国分直一「薩南諸島の考古学的調査―第一報　種子島北部・屋久島一湊に於ける調査」（『考古学雑誌』三九巻一号、一九五三年）。

（7）寺師見国「鹿児島県の古鏡（特に各神社の鏡）」（『鹿児島県文化財調査報告書』第二輯、一九五四年）二八頁。

（8）https://www2.jomon_no_mori.jp/kmai_public/kantan_index.html?serch_type_map

（9）前掲注2参照のこと、一〇五頁。

（10）国分直一「種子島の玉葬形式の埋葬」（『毎日新聞』一九五七年九月三日）学芸面。

（11）斎藤忠『日本考古学人物事典』（学生社、二〇〇六年）一三八頁。

（12）国分直一「「薩南民俗」をもつに当つて」（注3に同じ）一頁。

小稿を執筆するに当たり、当館主任学芸専門員の上村俊洋氏には多くの御助言をいただいた。末筆ながら感謝申し上げたい。

（たけもり　ともこ　学芸課資料調査編集員）